

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	以前に掲げた理念は存在しているが、内容は地域密着型サービスを意識しているものではなく、地域との関わりも含めて、再検討が必要と感じているが作業は停滞してしまっている。	現在、新しい理念の策定に向けてグループワークを実施し、提供しているサービスの現状と課題の検討を始めたが、作業が停滞していることが窺える。	今後は地域密着型サービスの意義や役割を踏まえ、管理者と職員の思いが盛り込まれた理念を策定し、実践に繋げていくことに期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の住民との普段の関わりはもちろんのこと、頻度は多くはないが、施設行事や関連施設行事への相互の参加にて交流が図れるよう心がけている。	近隣とは、日常的な挨拶をはじめ野菜のおすそ分けが届く等、身近な付き合いがなされている。事業所行事への招待や、近くにある同法人施設が開催するイベントへの参加等で地域の方々との交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	勉強会など特別地域に向けて還元するような機会は持っていないが、地区の交流会や運営推進会議にて相談への助言や認知症理解への啓発を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、事業報告や提供サービスの確認などが中心であるが、施設を理解していただく機会ととらえ、細かな情報発信に留意している。また会議では、施設サービス以外の話題で意見交換することもある。	定期的開催され、事業報告やサービス提供状況を細かく報告している。会議では報告事項だけでなく幅広い意見交換が行われ、結果を運営に反映させている。会議録は職員にも開示されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村の高齢者支援課、福祉課それぞれの担当者とは普段から積極的にコミュニケーションを図り、スムーズな協力関係が維持できるよう心がけている。	利用者にとってより良いサービスが提供できるよう、市の高齢支援課、福祉課や包括支援センターの担当者と普段からまめに報告や相談を行って連携を深め、スムーズな協力関係を築いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人の指針、マニュアルにそって支援しているが、稀に帰宅欲求から不穏、興奮状態となってしまう方がおられ、夜間帯職員が1人になってしまう時間帯に玄関の鍵をしようことがある。また、普段の関わりの中で「待ってて」「座ってて」などご利用者の想いや行動を制限してしまう場面がある。	法人の指針、マニュアルには具体的な行為が挙げられ、研修会を行って全職員で身体拘束をしないケアに取り組んでいる。また、日常的な関わりの中で、気付かないうちに利用者の思いや行動を制限していないかを振り返り、自由な暮らしの支援に努めている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	普段の生活で虐待はないと思われるが虐待に対する知識や意識不足は否めない。施設内で理解を深める勉強会を行いたいと考えている。	法人内で「権利擁護委員会」が発足し、虐待防止についての取り組みが行われている。管理者は外部研修会に参加して理解を深めており、勉強会を開催して職員に伝達したいと考えている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業は利用者がおられ以前より内容の確認や関係者との連携を行っている。成年後見制度は知識不足な部分が多いが利用者の中に必要性を感じる方もあり、これを機に学んでみようと考えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、自グループホームの特性を十分理解していただけるよう丁寧な説明に心がけている。またご利用者、ご家族の不安がなるべく軽減できるよう働きかけている。退所時、または退所に向けた内容を伝える際は、あらかじめ利用者の状態と施設の限界を理解、納得いただけるよう慎重に説明し納得いただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご利用者、ご家族からの意見は日々の関わりの中からいただいているのみで、運営推進会議以外では特別な機会を設けてはいない。いただいた意見で可能なものはすぐに反映させている。	利用者の意向は、日々の関わりの中、わずかなことでも聞きのがさずに受け止めるよう心掛けている。家族には、面会や電話の際に問いかけ、可能なものはすぐに反映させている。意見箱も設置されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者と職員が顔を合わせて話し合う機会は月一回実施のスタッフ会議が該当するが内容は管理者からの連絡や依頼、ご利用者の関わりについてが多く、職員の意見を聞く機会としては普段の業務の中での方が多い。	スタッフ会議で事業所運営についての意見交換をしている。管理者は、「利用者を一番よく理解しているのは職員である」という認識のもと、普段の業務の中で、職員との意見のやりとりを大切に業務改善に繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人内で行っている人事考課面談によって個々の実績の評価を行っている。労働条件については法人本部の管理するところで私たちが関わることは出来ないが同業多職の中でも恵まれた環境であることは職員間で共有している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内のキャリア別の研修や認知症に関する研修、施設内では利用者とのかわりに関する研修をそれぞれ実施し全職員が参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内地域密着型サービス間で連絡会を定期的に行い、情報交換や待機者管理、また職員向けの研修会を行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前、入所後、不安点や困りごと、希望などをことあるごとに伺い、良好な関係、安心感が保てるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご利用者同様、入所前、入所後に不安、疑問、要望など伺い、良好な関係、安心感が保てるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご利用者に対してはなるべくご自身の能力を活かせるような関わりや安心できる環境づくりに留意している。ご家族にはサービス内容が理解いただけるよう十分な説明を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に生活している意識を大切にして関わっているが、ご利用者の重度化や安全面の配慮から職員の介助の度合いが多くなっている。残存能力を活かしきれず必要以上の介助になっている部分もある。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時の報告以外では、月一回の便りや隔月一回の家族通信にてご利用者の近況を伝え、なかなか面会に来れない遠方のご家族との関係維持を図っている。	「なかよし寿の家だより」や担当職員からの「家族通信」で利用者の近況を伝えている。家族の状況にも十分配慮しながら、電話や面会、通院付き添い等をお願いし、共に支える関係づくりに努めている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会や外出などで関係を意識できない方には普段のお茶会や食事の中で話題として意識していただけるよう働きかけている。	家族や本人から情報を得て、お墓参り、家のあった場所、寺、姉妹の家等に出かけている。また、日常のお茶会や食事、散歩などで馴染みの人や場所を話題にし、心の中の関係維持に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症重度な方がコミュニティの中で孤立しがちになることが多く非難、攻撃対象になりやすい為、職員の立ち位置や介入の仕方など定期的に確認している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	身体状況の低下、体調不良等でグループホームでの生活が困難となった方に関して、次の生活の場所を一緒に探し、なるべく不安を軽減できるよう努めている。また退所後も相談があった場合は利用中同様誠意をもって支援させていただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご利用者個々の思いや暮らし方の希望や意向は把握できるよう努め、実現可能な事柄は時間をおかず実行している。但し、希望や意向を表せない方にはご利用者本位と言うよりも職員本位となることが多いと感じられる。	日々の関わりの中で、本人の言葉や表情、行動等から思いや意向を把握するように努めている。困難な場合は、家族から情報を得るようして、職員が察したことを共有しながら本人本位に検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴などはインテークの際に伺い、暮らし方や生活環境などは入所後の状況や意見などを参考に随時変更している。	本人や家族からの聞き取り、関係機関からの情報を参考にしながら、センター方式を活用して、日々の関わりの中で一人ひとりの暮らし方や経験等の把握に努めている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	特に体調面に関しては変化の把握に努め必要な医療に繋げる判断が遅くならないよう心掛けている。それに比べ精神面や身体面の変化は把握が遅れることがある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人の課題と関わりについて職員の考えを同意していただくことが多く、ご本人やご家族の意見が出やすくなるよう働きかけに工夫が必要である。またご家族の同意が不定期となることが多く反省される。	担当職員が本人や家族と話し合い、計画に反映させるようにしている。センター方式を活用して、毎月モニタリング、3ヶ月毎の総括、6ヶ月毎に介護計画の見直しを行い、現状に即した介護計画の作成に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録内容には職員個々に差があり、ケアプランにそった内容、職員の関わりや気づきなどを積極的に記録して欲しいと働きかけているがなかなか改善されない。大きな変化のあった時に計画の見直しを行っているのが現状である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご利用者、ご家族の個々の事情によって柔軟に対応しているが既存のサービス以外の多様化には特別取り組んでいない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	個々のニーズにそったものや全体での外出行事など必要な地域資源を活用しながら、ご利用者の楽しみに繋がるよう考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	全員共通の精神科、個々に異なる内科それぞれでご利用者に有益となるよう良好な関係を維持できるよう心がけている。またご家族と連携しながら臨機応変に受診できるよう考えている。	専門医は協力病院になっているが、内科はかかりつけ医の受診が継続されている。医療機関には事前連絡や情報提供を行い、良好な関係を築きながら、家族と情報を共有し、受診の付き添いや緊急対応を実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	自施設に看護師の配置はないが、協力施設看護師に適宜課題を相談し、指示、助言を得ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が発生した場合は極力毎日面会に伺い、ご本人の状況や病院関係者の話をリアルタイムで把握できるよう努めている。また退院後、ご利用者が安心して生活できるよう、また職員が適切に関われるよう病院関係者との引継ぎを慎重に行うよう心がけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	申し込み受付時、入所時にご家族には施設の特性や限界、考え方など伝えている。また重度化が進みグループホームでの生活が限界に近づきつつある時は上記内容に加え、ご本人の状態も合わせて十分に説明しながら納得いただき話を進めている。	看取りの介護は行っていないことを申請時に説明し、入居時に確認している。重度化した場合や事業所での対応が困難になった場合には、早い段階から時間をかけて話し合い、医療機関等と連携しながら、本人・家族の安心と納得が得られるように支援している。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	母体施設主催の応急手当講習には毎年全職員が参加し、心肺蘇生措置や異物除去などを学んでいる。応急処置や事故対応マニュアルはあり、それにそった対応を取るよう心がけているが職員個々により理解度は異なっている。	年1回、法人主催の応急手当講習会に全職員が参加している。緊急対応マニュアルも整備されているが、実践力が身につくまでには至っていない。ケースを想定した訓練やマニュアルに沿った訓練の取り組みを検討中である。	今後は、全ての職員が応急手当や初期対応ができるように実技の伴う訓練を定期的実施し、実践力を身に付けることが望まれる。
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災発生時に関しては年二回の防災訓練を実施し避難誘導確認している。地震、水害などでは母体施設のマニュアルを参考に行動を想定しているが施設独自のマニュアルや訓練も必要と考えている。	年2回(1回は夜間想定)母体施設と共に避難訓練を実施している。訓練には、町内会長も参加するなど、地域との協力体制を築かれている。また、避難路の確認や災害に備えた備品等の準備もされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	基本的には丁寧な言葉使いになるよう心がけているが、「共に生活を送る仲間」ということから親しみやすい言葉使いとなることもある。但し、場面によってはそれがエスカレートして不適切な言葉かけになっていることもある。	職員は、本人の気持ちを大切にがあるがままを受け入れ、穏やかに過ごしてほしいと願い、入浴や排泄介助には羞恥心への配慮を心掛けている。管理者は、不適切な言葉や対応について会議等で注意喚起し、職員の意識を高めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々や集団の場面で思いや希望が表せるよう働きかけることはあるが、日常生活の中でご利用者が選択、決定する場面は多くない。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	先日振り返りの研修を行い、業務優先職員中心となっている事柄を挙げ反省する機会を持った。少しずつではあるがご利用者本位の関わりになるよう取り組みを始めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	なるべくご本人が着たいものを着ていただくようお任せしているが、認知症重度な方には、体調面や介護面を考えた職員主導の衣類となっていることが多い。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	可能な方が少なくなり作業を一緒に行う方が偏りがちであるが、なるべく参加いただき役割を感じていただけるよう働きかけている。	下準備や後片付け、盛り付けや配膳等、その人にできる事を気持ちよく手伝ってもらおうよう働きかけている。また、利用者と職員が一つのテーブルに集い、何気ない会話をしながらの食事は楽しみの時間となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ご本人の嗜好、健康面での制限などには代替品を準備して提供している。個々にある食事量や水分量の差を把握し、不足の場合はスムーズに摂れるよう考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前食後等にうがいや歯磨きを行っているが、拒否や動作の理解が困難で出来ない方の口腔ケアは課題である。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	基本的に全利用者トイレでの排泄を促し、必要以上の排泄用品の使用にならないよう考えている。但し、動作何とか可能であるが衣類汚染が頻繁な方の過介助や拒否により職員が関われない方の清潔保持に課題がある。	一人ひとりの排泄状況を把握して、トイレでの排泄を支援している。介助拒否や衣類汚れのある方にも自尊心や羞恥心に配慮し、さりげない声掛けや誘導を心掛け、自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	元々に体質に加え、水分量不足、運動量の低下から便秘ぎみとなる方多く、多くの方が何らかの下剤を服用しているが飲みすぎにならないよう排便状況には十分注意している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	時間帯は職員の都合で午後のみとしてしまっている。希望される方は毎日入っていたが、拒否や気が乗らない方などは間隔が空かないように気をつけている。2人介助必要な方の入浴は職員の体制を見ながらあらかじめ日を設定してしまっている。	入浴は午後の時間帯で本人の希望や体調に合わせて行い、ゆず湯・菖蒲湯等、季節に応じた変わり湯や入浴剤の使用でゆっくりと寛いでもらっている。同性介助やさりげない見守りで羞恥心に配慮ながら、個々にそった支援をがなされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご利用者の負担にならないよう休息していただいているが、日課に沿って「起きていただく」「まだ休んでいただく」よう職員から働きかけることはある。日中夜間共にご利用者が気持ちよく休めるよう適宜室温調節を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ご利用者個々の薬全てを理解してはいないが適宜確認できるよう直近の薬の説明書はファイリングしてある。変更があったときなど想定される変化には特に注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	可能な方のみであるが食事の準備、後片付けなど行っていただいている。誕生日のお祝いや外出行事で生活の中での楽しみを感じていただけるよう働きかけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	全体での外出行事以外では天候や職員の体制から外出することがある。ご家族と一緒に定期的に外出される方おられるが機会がない方などは職員が同行して外出している。	行事での外出の他に、家族と一緒に出掛けたり、本人の希望で職員がお墓参りに同行する等、外出の機会を大切にしている。天気が良いときは地域内を散歩して、地域住民とも馴染みになるなど交流を楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自施設ではご利用者のお金の所持や施設での預かりは断っているため使用の機会がない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があったときは電話の取次ぎ、手紙出しの支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間では不快になるようなことがないように注意している。季節によつての変化を中庭で感じていただくため花や野菜の話題を話しかけ注目が行くよう働きかけている。但し、職員の足音や食器の片付けなど音への配慮は十分とは言えない。	リビングや廊下の壁には利用者の作品や行事の写真が展示されており、手作りのカレンダーや花が飾られている。今後は季節と違う装飾や物品の整理整頓、後片付け等、暮らしの場を整える配慮も大切と考える。	今後は、飾りっぱなし、置きっぱなしにならないよう季節感や生活感に配慮しながら、生活環境を整えていくことが望まれる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	夕方や夜間のリラックス時間は食卓の座席にとらわれず個々の関係性に配慮して場所を移動し		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所前は身体状況などを考慮しベットやタンスの配置を行っているが入所後必要に応じて変更している。またベットやタンス以外は個人のを自由に持ち込んでいただき、購入するものは極力ご本人に選んでいただいている。	ベットやタンスは本人の使い易いように配置され、テレビや家族の写真など馴染みの物も持ち込まれている。また、趣味を生かした作品も飾られ、本人が居心地良く過ごせるように居室づくりがなされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレはわかりやすく「お名前」や「トイレ」の表示をさせていただいている。わからなくなった時なども安易に誘導せず極力声かけのみで行っていただけるよう配慮している。		